



第22回日本心臓リハビリテーション学会学術集会
NPO 法人ジャパンハートクラブ共催



教育セッション3

やってみよう！ 心肺運動負荷試験

応用編

日時

2016年7月17日(日)
10:40~12:10

会場

東京国際フォーラム
第2会場:Bブロック7階 ホールB7-1

座長

安達 仁
群馬県立心臓血管センター循環器内科
折口秀樹
JCHO九州病院内科

演者

狭心症や心不全などのCPXの実例、判読困難例
小池 朗
筑波大学 医学医療系医療科学
CPXを用いた心臓リハビリテーションの工夫
小笹寧子
京都大学 医学部附属病院 循環器内科



やってみよう！ 心肺運動負荷試験

応用編

座長のことば

安達 仁

群馬県立心臓血管センター循環器内科

折口秀樹

JCHO九州病院内科

心臓リハビリテーションにおいて運動療法は欠かせない。また、心疾患は「労作時胸痛」や「労作時の息切れ感」など、活動中に症状が出現することが多い。そのため、運動負荷試験は必須で、なかでもCPXはその中心的な検査として普及しつつある。

CPXを用いると、心機能、呼吸機能、骨格筋機能、自律神経機能などの心疾患の重症度や予後に関与する指標が、どの程度の動きの時にどの程度異常を示すのか、客観的な数値として得ることができる。これらのデータを利用すれば、適切な運動強度の設定により安全な運動療法が実施可能になるのみならず、運動中の血行動態の変化が観察できるために労作時の症状を有する患者の病態を理解でき、どの部分を優先して治療するべきかを決定することができる。

しかし、CPXが正しく理解され、利用されているかと思うと否である。ATと最高酸素摂取量のみしか注目されておらず、他の多彩なパラメータが利用されていないことが多い。また、「最大負荷」を用いるために、運動を十分に実施できる患者にしか適応がないと考えられることもあり、必要な患者に実施されていないこともある。これは、心疾患患者にとっての悲劇である。

本セッションでは、CPXや心臓リハビリテーションのエキスパートの先生に、CPXのリアルワールドのデータを教えてもらい、心臓リハビリテーションの現場で、どのように活かすかについて講演して頂く。

